

# ルーラル・ツアーズのすすめ

## 地域づくり

我々は、第二次大戦後の国土復興  
以来の発展は「全国総合開発計画」  
の積み重ねを基本としてきた。この  
全国総合開発計画は、一九六〇年の  
所得倍増政策につづいて、一九六二  
年に「地域間の均衡ある発展」と題  
して、具体的手法として「拠点開発構  
想」を示している。その後一九六〇  
年「開発可能性の全国土への拡大・  
均衡化」大規模プロジェクト構想、  
一九七七年「人間移住の総合的環境  
の整備」（定住構想）、一九八九年  
「多極分散型国土の構想」（交流ネッ  
トワーク構想）、そして一九九八年

には「二十一世紀の国土のグランド  
デザイン」（地域の自立の促進と美  
しい国土の創造）が提示されている。

それらのいずれもが全国土の開  
発、そして地域の発展の理念と手法  
を示したものであるが、何かしら  
「国のための地域（地方）」という感  
じが否めない。しかし、国土総合開  
発の開発理念も大きく変化し、開発  
の主体も国主導の地域開発から地域  
の選択と責任による地域づくりの時  
代へと移行し、国と地域との区分  
が示されてきたようである。しか  
し、相変わらず打上げの話が多い  
ようであり「地域、地域と言われ  
ても」と、地域がつまづきかねな  
いような話も散見される。



農村空間研究所長

梅田 安治

text : Umeda Yasuharu

## 観光地としての地域

多自然居住地域などの話には、また、瘡蓋（かさぶた）的都市を増殖させて「都市の田舎侵略か」という感じである。その中で「地方圏への外国人観光客の誘致」に目をとめ、「地域の特色を生かしたテーマに即した広域観光ルートの開発、広域観光の拠点となる宿泊滞在拠点の整備等を通じ、わが国の代表する新たな国際的観光地として国際観光テーマ地区の形成を進める」とある。題目の割に、中味は相変わらず官・中央発想である。地域としては、国を代表するものもよいが、安定して生活しているところへ客を迎え入れることにより、若干の交流を楽しみ、自分をかがかせる機会とし、過疎で萎縮しつつある地域に若干のゆとりが生ずることでのよいのである。

## 非日常の日常化

先日、横浜から世界一周の豪華客船が出航していった。乗客は、始めての人は少なく、多くは複数回の人であるという。この船旅の楽しさを示しているようである。

日常の雑事から解放され、それぞれキャンピングで個人の時間・生活を保障されながら、船上での各種ゲームなど非日常的なものへの挑戦、レストランでのおいしい楽しい食事、ときには世界各地の港でのさらなる非日常性、異（珍）体験など、想像している者にも楽しさが伝わってくる。しかし、この数年間、私が体験している農地の中の古い農家を転用してのセカンド・ハウスで過ごす時間もそれと同じくらい楽しいと思ったりする。

周りの極わずかの畑の緑の作物達の生命感が伝わってきて、長期間の旅には出ていけないと思わせてくれる。こんな楽しいことは、他の人にもすすめたくなる誘惑にかられる。

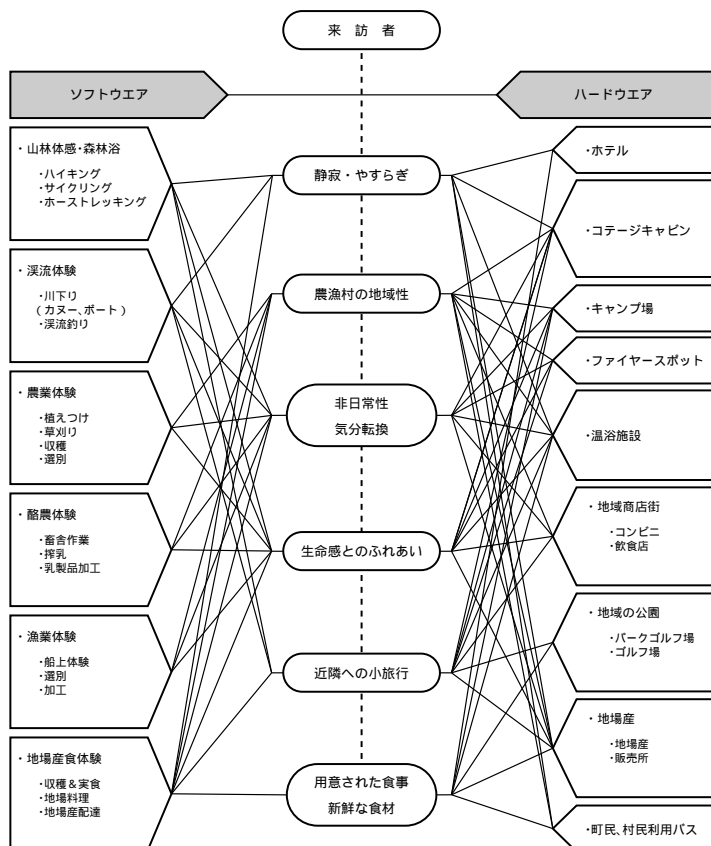
## 自然の生命感の日常化

農地のはずれの山林の緑にコテージ・キャンピングでもあれば、農地の方からのやさしい風と、木々の梢をささやくように、そして、ときには強く打ちならしていく風に自然の変わりよう、厳しさなども感ずることが出来る。キャンピング生活では疲れてしまいう年齢でも、雨風を凌ぎながら雨風の強さ弱さを感じさせてくれる程

度のキャンピング・コテージがあれば、ローリング・ピッチングの船室みたいなもの。夜は勿論、雨の日は、無慮の時を過ごすのもまたよい。雨にぬれる元気があれば、外に出るのもよい。お天気の日には、外に出る。地域の人たちは働いている。時期と時間を合わせれば、そこへ参加して貴重な異体験を楽しむのもよいであろう。農業はい

つも生命系につながる仕事をしているので、いろいろな難しさはあっても、誰でもそこで手先から腕、腰を使うことで、汗をかくことができるのと同時に、思考系まで刺激してくれることに気付くのである。直接ではない、汗からの思考系刺激は非常に優しいものである。そして、地産のものを食することのできる食堂・レストランがあると

来訪者のニーズとその対応



いい。

そのレストランで、地元の人たちもしばしばハレの食事をするのもできる。地元の人たちも最近では多様になってきた。本来的な地元の人達、そして都市部で十分働いてリタイアして「終のすみか」として農村の環境に魅せられて移住してきた人達、都市生活を体験したりツアー組などなどである。各地から集まった者同士、地元の人達と情報交換を兼ねて話がはずむことだろう。また、それらを側でジッと聞いたり見たりしているだけの参加でも楽しいものである。

十勝でファーム・インのパイオニアとでもいってべき湯浅さんは、「宿泊者との交流はそれだけでなく、地域の交流の活性化をもたらししている」と言っている。第三者が入り、状況にわずかな変化が生ずることが、地域に波及していくのである。また、地元でのイベントなどに参加することで強い印象としての思い出づくりができたりする。地元の人達も旅の人達をある距離をおいて気軽に迎え入れることで日常性を脱したイベントとすることができる。考えているうちに楽しくなってきた。

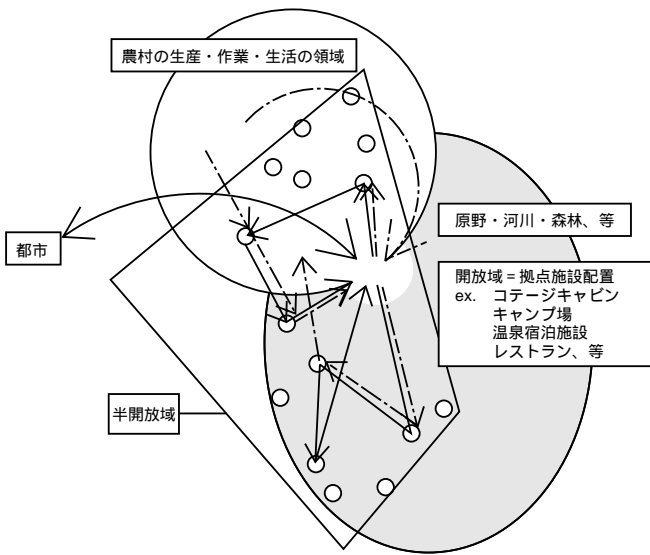
## 日常の非日常化

何も特別のものではなくても、いや平凡なるが故に楽しいことができる。ほんの少しの仕掛けをするだけで、この仕掛けとは極わずかのハードと地域の人達による綿密なソフト・システムとそれらのシンセサイズ・マネージメント（総括管理）ということになる。さらに近隣の地域が連動（シンフォニー）したシステムをつくと来訪者は極わずかの移動で多彩な体験、体感を楽しむことができるだろう。地域内を移動するのも面白いだろう。

毎日働いているところへ来訪者が来る。しかし、作業の大部分は生き物相手であるから、とても時間を割いてはいられない。お客さんには、時間の空いているとき、手の空けられるときに、来てもらえば良い。そして、作業のあるときは手伝ってもらえば良い。お客にとっては、楽しい体験である。

ただ、作業内容とスケジュールを十分チェックして、素人にも出来るように遊び構造に分割しておき、十分説明できることが必要である。馴れてしまえば難しいことではない。

農村地域の生活とルーラル・ツアー



開放域の中に設けられた滞在拠点施設 = 宿泊・食事

- 半開放域の中のアメニティ・拠点 = 農村地域の体感・体験 (見る・触る体験・生産収穫体験・山林体感・川下り・釣り、等)
- 来訪者のツアー動線
- 地域住民の同行・案内・共遊動線

自分たちのやっていることなのだから、難しいことは自分でやればよい。それは時期により、作物によりいろいろあり、素人に手伝ってもらい、遊ばせることの出来るものから、全く関与されたら困るものまで雑多である。

それでも、いわゆる消費者と「フェイス・ツウ・フェイス」にな



り、ときには言葉の通じない人と手真似、足真似で頑張ってみるのも楽しいのではないか。消費者に農業・農産物のことを知らせる絶好のチャンスである。とても、その全貌は知らせるべくもないが、その一断面を知ってもらうことはできるであろう。「有機農産物」「減農薬栽培農産物」などを知識としての定義や生産物だけでなく、その生産過程のあり方など容易でないことを知ってもらうチャンスである。

ここでは生産者主導で、話をすすめよう。居ながらにして訪ねて来てくれる友人である。自分の体験を話すことは、自分を豊かにする。他人の体験を聞くことは、それ以上に豊かにしてくれる。

### 地元も楽しむ地域の開放

これまでも都市民のための農業体験・農村交流などに多くの事業がなされているが、継続している例は少ない。これは都市側で、農村・農業の実態を十分に知らぬまま事業が立案される故なのだろうか。それならば農家側で、まずは自分達の生産・生活の行動のパターンをチェックしてシーズンごとの一日のタイムテー

ブルを作成してみてもどうだろうか。それぞれに忙しく、時間にそんなに余裕はないであろう。しかし、何とかその時間を見つけ出せないだろうか。自分も楽しい時間にできると考えればどこかに余裕ができそうである。

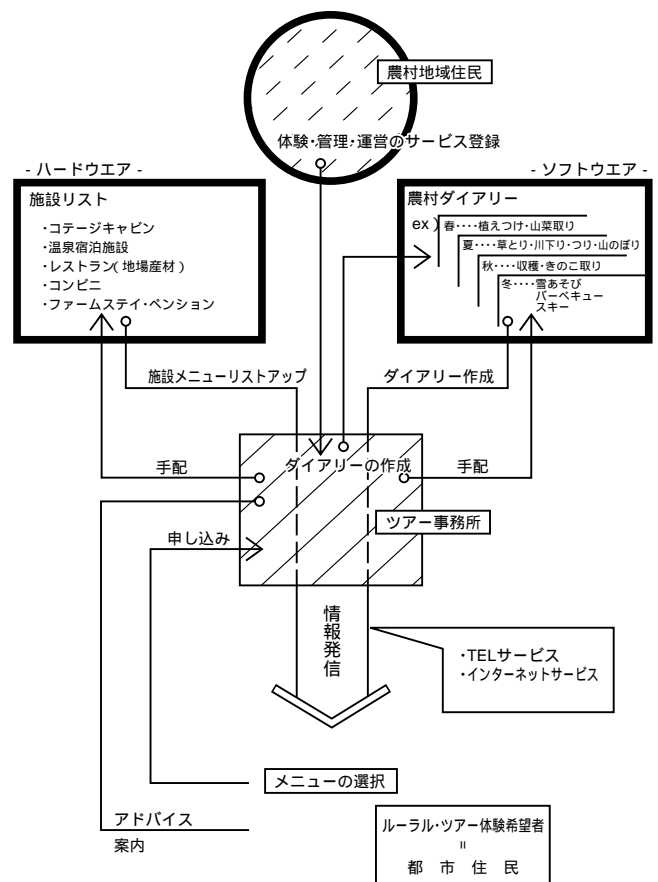
また実働の時間にも、仲間を入れることはできないだろうか。独りでするよりも仲間を入れて、自分の仕事を他人に理解してもらい、また他人からの評価をうけながら仕事する時間があってもよいのではないか。そんなタイムスケジュールを地域で持ち寄ってすり合わせをすると、結構他の人を加えられる時間ができくるのではないだろうか。

それは客人を招き入れるだけでなく、これまでの自分達の生活の部分を含めて生産の行動を見直すチャンスにもなり、ときには外来者を客人としてではなく共働者、共遊者として練り込むことも可能にしてくれるだろう。

### 理解、そして共楽

畑の上ばかりが農作業ではない。例えば収穫物の選別もある。イモ・人参など大量に選別工場で行なう手法もあるが、野菜類などは手作業が

ルーラル・ツアーの総体イメージ



多い。サヤエンドウの選別など体験してみると、普段、自分達がいかに流通の末端にいるかが判ったりする。ホウレンソウの外葉は、何故取るのか。(外葉は枯れやすく見映えないためである。) 大体消費者は、スーパードで袋に入っているホウレンソウが多く、その労力をかけて外葉をはずしていることなど知らないのが当然である。作物としてはいろいろな大きさ・形状のものがあるのは当然で、食物として何ら欠陥のないもの



が、食品となると基準値外というだけで、はずされていくことに涙が出るような思いをさせられたりする。

以前、メロンの選果場をみたとき、見事にそろっているのに感心していると、側にいた農業に興味のあるという都会生まれの製鉄会社の友人は二〜三%の規格はずしをみて、「農業は効率が悪い。もう少し規格揃えをしなくては！」と言った。私は彼を農家の庭先へ、そして、畑へと連れて行き、そこに残っているメロンを見せた。「メロンは型にはめて造る訳ではないからな」と。

「見る」、「触る」が理解の第一歩なのである。その作物の成育・生産過程のどこかで触れたものが収穫されたとき、少しぐらい小さくても、大きすぎても、うれしいものである。そんなことを都会の人に体験させるのは、農村地域での少しのシステム化で、可能なのではないか。ときには、山林の中を歩く案内をしたり、川下りや溪流釣りの指南もしたり、それが地域の資源を守り、活用することになるのではないか。

アウトドア活動というのは、遊びに来る方の身勝手な部分が多く、地元としては迷惑する部分が多い。グリーンツーリズムに関する座談会で

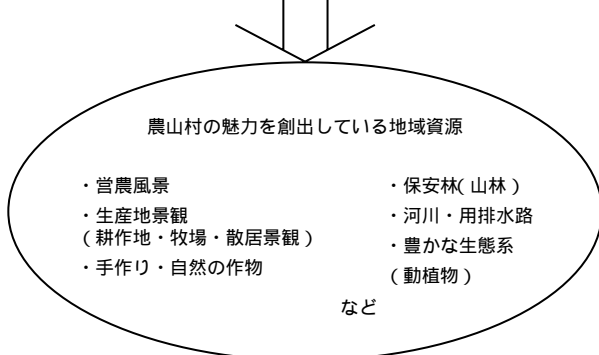
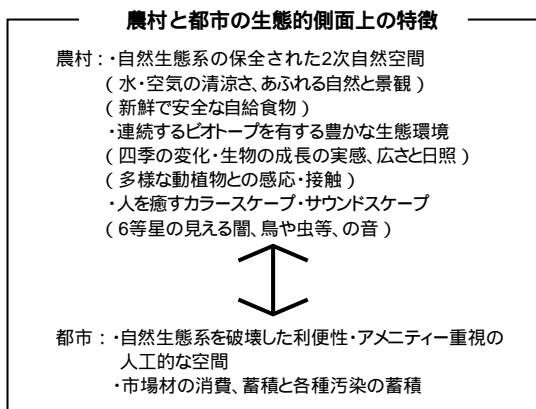
「一時的にお客さんがワッと来て、ゴミだけを投げていく」そして、もし観光的に一律化したら、その瞬間に地域らしさ、個々の農家らしさは全部捨てられる。だけど現実には人のつながりによってその人らしさ、地域らしさをきちんと後から伝え合っている」という意見が出ている。地域らしさ、個々の農家らしさを失うことはできない。そのためには、来訪者に地域の人達が確実に「フェイス・ツウ・フェイス」で、接することである。それが commons としての地域を保全することに通じるのである。

漁村なら船からの荷揚げを、そして干魚用の背割りを体験してもらい、一週間後には宅急便で送り届けよう。届いた方は、友人達と楽しい夜が過ごせること保証ものである。都会サイドとしては、自分で手掛けたのは三匹でも、届くときは二〇匹にしてもらおう。

### 観光は変わる

日本人のレジャー活動の第一位は「国内観光旅行」、第二位が「外食」、それに「園芸」、「庭いじり」と続いているという。しかも、その主流を占めているのは、中高年の女性であ

る。いわゆる「商品」としての観光地めぐりには飽きてきているのである。「国内観光旅行」と「外食」といえば非日常性であり、「園芸」、「庭いじり」とは自分周辺をやさしく飾りたい、生命のあるものを育みたいということが。そんなことをかなり満足させてくれるのが、農地と自然の境界ゾーンで、吹き渡る風にあたり、ときには雨にもあたりという滞在旅行である。自然のきびしき、農地での生命感、農村での人情、新鮮な食品・作業を通しての知的刺激



とは、欲張り過ぎだろうか。

農地の外れのコテージ・キャンプで、これらは充足されるのである。北海道の農村地域ならどこにでもあるサイトである。そして、農村の人達も自分達の農作業スケジュールをシステム化することによって、過疎化を転じて、新しい型での隣人を招き入れ得るのである。ただ、そのためには若干の施設的対応も必要であろう。

例えば、田圃の畔も、いま少し広くしよう。農業の専門家は歩けるが、本田面積を得るためにだんだん痩せさせられた畔道は、都会の人には歩き歩きづらい。全部でなくてよい、部分的に広くして草を刈り込んでおけば、大区画水田のため影のうすくなった畔道の復活となり、風景的にもきれいにでき、その場の草刈りも含めて馴れない多人数の作業も容易にしてくれる。

## 新しい農村としての空間施設

畑地帯でも観光地といわれているところでは、来訪者に踏み込まれて、「立入禁止」とか、遂には「畑のものは山菜ではありません。取らないでください。」等と看板が出たりし

ている。心なき来訪者に泣かされている事例である。

しかし一方では、イギリスあたりのフットパスなどを例にあげて農地の観光的開放化の声もある。イギリスのフットパスは、住民からの権利要求としての長い厳しい歴史的背景があつてのものであるから、いきなり事例とはならないが、日本では、水田には畔があり、畑にも小径がある。これからのシステム・形状を整備することで来訪者導入共存の環境改善となるであろう。水田の畔道は、その形状からして比較的管理は容易であろう。むしろ水管理施設などの保全に留意すべきである。

畑地帯では、私道は勿論のこと農地間は公道であつてもその状況により、周辺の農作業関係に利用優先権を与えてはどうであろうか。道路の周辺に農地があるのではなく、農地の中を道路が通っているのだと考えればよいのである。そして、ときには一般来訪者を条件つきで積極的に導入するようにし、そのためには道路にゲートを設けることがあつてもよいのでは。

酪農放牧地帯では、人だけが入れられるゲート、それ以外では犬などペットの同伴を許すゲート、馬に乗って

もよいゲート、車で通つてもよいゲートなどなど、それらは規則だけでなく、物理的にその条件が守られるような形状の設備を設けるとよい。

農地・農村の多面性の評価、農村と都市の交流、グリーン・システムなど多くの課題の基本的定着のためにも見知らぬ者同士、新しく隣人として親しくして行くための地域としてのシステム・ルールを積極的に地域自体がすすめるとともに、それを支援するための施設というのを考えるときにきているようだ。

